

地域活性化という「遊び」

53

京都市 福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

京 都市内の自宅で産声をあげ
8歳で福知山の山奥へ移住

ついでこの間まで田んぼのあぜ道でカエルや蛇を夢中で追いかけて遊んでいた長男が

この6月

二十歳の誕生日を迎えました。

料理の腕や包丁の砥ぎも

ここ1年で成長著しく

農場レストランのコース料理も

完全に任せられるようになり

調理だけでなく

器の選択、素材の生産、

完成した料理の撮影など

自分たちができることを

どのように世の中に伝えていくか

ということにまで興味を持ち始め

いよいよ面白くなってきました。

そんな彼らの活動に

興味を持っていただいて来村される

現在子育て中のお客様から

子育てに関する質問をされることも

最近をよくあります。

ただ

それを聞かれてその場で

具体的な方法を

うまく答えられるかという

なかなかそうもいきません。

あえて答えるとするなら

子供をよく観察する

ということでしょうか。

子供を観察すると言っても

子供だけ観察しているようでは

ダメで

その時の年齢や周りの環境

もつとと言うと

親や友達などとの人間関係や

時代の流れまで

注意深く観察する必要があります。

その時に大切なのが

農村に移住して経験した

素晴らしい子育て

自分の親としての視点を捨てて
子供の行動を

純粹に観察することです。

その辺りは

こちらに来て

農業に携わった経験が

とても生きていると思います。

移 住当初
右も左もわからないほど

農業の素人だった僕には

やはり観察するくらいしか

方法がありませんでした。

最初はやはり

どうしても

作物だけに目が行ってしまい

失敗を重ね

次第に土や根にも

目が行くようになりますが

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。

そこにある土だけ見ている
やはりダメです。

いろいろ勉強するうち

上級者ほど

地形や風土など注意深く観察し

育てようとする作物に合わせ

どう圃場を整えるかというところま

で考えていることに気がつき

そういう大きな視点でものを見るこ

との重要性は

子育ても同じだな

と思っただけです。

その時

子供に何が一番必要なのかは

本人に聞けば一番良いのですが

子供の頃は

うまく表現できなかつたり

立场上親や先生に気に入られるよう

な行動を取るのも

生き物としては

当たり前の行為なので

育てる側がよく観察して



人生初ビール。
僕の父は僕が高校生の時に亡くなったので
親子で飲んだ経験がありません。



移住当時（8歳）。田んぼの溝掘り。
子供にとっては大変力のある作業ですが、大人と同じことをやらせてもらえる
というのは当時楽しかったそうです。



自然学校ではスタッフとして
子供の安全を確保しつつ
自由に川遊びさせることを
真剣に学んでいます。



蛇を捕まえては
母親を困らせてました。

その時のベストな対応を決めていく
しかありません。

人間と違って植物は喋りませんから
その辺りは農業をやるうちに
対象をよく観察するという癖が
身についたのでしょう。

今 思うと
子育てが逆に農業に
良い影響を与えた感じもありますが
どちらにしろ
主役が子供や自分が育てようとする
作物だということは
絶対に忘れてはいけな
いと思います。

主役は自分ではないのです。
長男も数年前から
自分が小学校の頃通っていた
週末自然学校のスタッフをしており
「育てる」ということに
とても興味が出てきたようで
最近はず
僕が親としてやってきたことが
当の子供として
どう感じていたか等
彼の話聞きながら
これからの教育について
一緒に考えています。

農村に移住し
素晴らしい子育てを
経験させていただいた身としては
この先何らかの形で農村に恩返し
ができればと思います。